

Tails

Annual Report 2020-2021

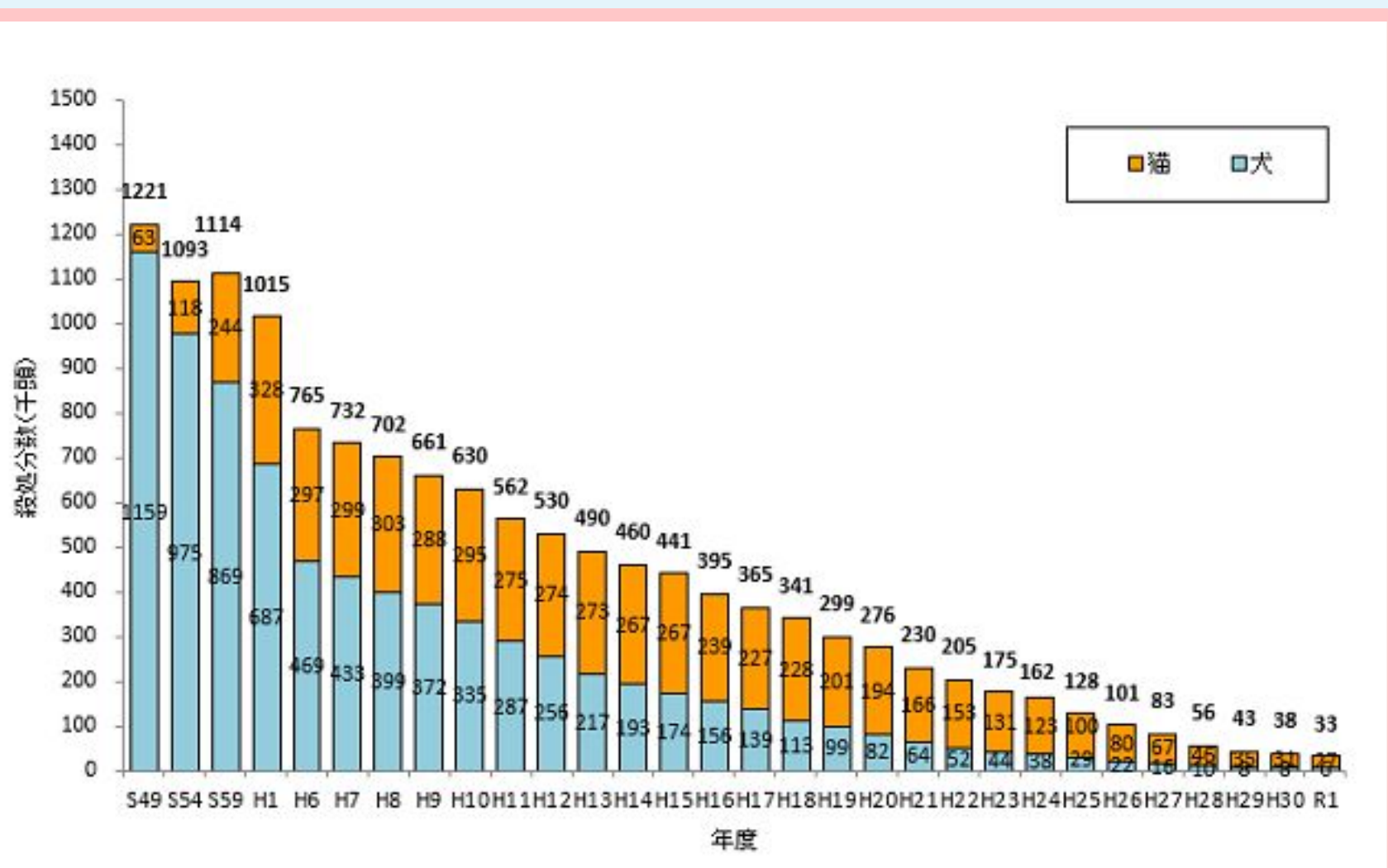


Otsuma Nakano
Junior & Senior High School

Incentive

私たちがこのプロジェクトを始めたきっかけは、コロナ禍におけるペットブームだ。お家時間の癒しを求めてペットを飼う人が増え、需要が高まった一方、飼うことの大変さから購入後すぐに動物保護団体に保護を頼むケースが増加した。

私たちは、ペットブームの影で相次ぐ飼育放棄に、保護施設の経営状況が悪化し、多くの犬猫が辛い状況下にいることをSNSを通じて知り、少しでも犬猫のためになる活動をしたいと考え、このプロジェクトをはじめた。



Current Status

近年犬猫の殺処分数は減少、譲渡数は増加し、犬猫の殺処分の現状は改善しているものの、2019年に殺処分された犬猫の数は32,743匹と、日本の犬猫の殺処分の現状はまだまだ良いとはいえない状況だ。諸外国と比べてみると、日本がどれほど動物愛護の取り組みに遅れており、犬猫の殺処分の現状が良くないことが顕著に現れている。たとえば、ドイツは「ティアハイム」という保護施設の運営によりペットショップがほとんどなく、獣医の同意なしの殺処分は行われていない。また、イギリスではライセンスの規定など犬猫の法律がかなり整っており、収容された犬猫の殺処分率も日本が約4割であるのに対し、イギリスは約1割にとどまっている。

このような現状になっている原因は、主にペット産業、飼い主、野外での繁殖という3つに分けられる。そしてこれら3つの原因により、余剰犬猫が生まれ出され、多くの犬猫が最終的に殺処分という運命をとげることになるのだ。

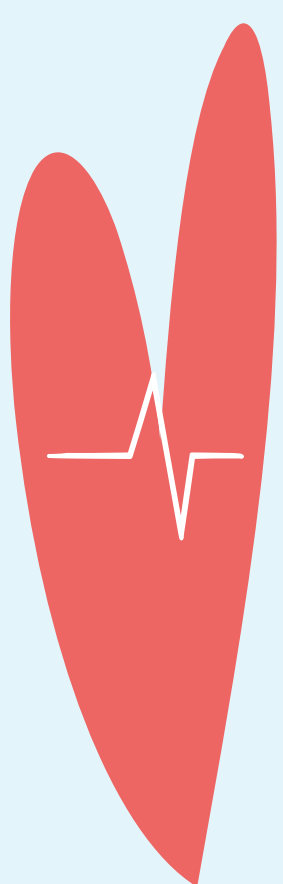
この状況を打破すべく、私たちは犬猫の譲渡数を増やし、出口を広げることが重要だと考えた。

Path to the Solution

私たちはまず、植物や動物の生命に関する授業を展開している東京農業大学農学部
の学生さんにお話を伺った。その方は、現代の都会に住む子供たちの命に関わる機会
の少なさに懸念を抱いていた。動物の命に関わる機会が日常生活の中でないために、
私たちは動物に生かされているという意識を持たず、動物を軽視する傾向にあるとおし
やっていた。また、学生のうちに動物の命の重さの教育をすることで、動物に対しての
意識が変化するのではないかということもおしやっていた。

さらに私たちは、里親会や広報活動をしている非営利活動法人の東京アークさんの
方々にお話を伺った。実際に犬猫の現場に向き合っている方々のお話によると、ペット
ショップの制度や法律を改正するより、啓蒙活動を通して人々の意識を変えていく方が
迅速かつ簡単な解決策だそう。東京アークさんは、様々な場で講演会を展開してお
り、その講演会を聞いた方が実際にその足で里親会に参加して保護犬猫を引き取った
というケースも多いそう。

そこで私たちは、啓蒙活動の影響力の大きさを痛感し、自分たちの通う学校の中学生、
高校生を対象に啓蒙活動を行うことにした。



Solution

□ 動画作成

新型コロナウイルスの影響により、対面でのプレゼンテーションはできなかったので、動画を撮影し、啓蒙活動に励んだ。
「1匹でも多くの犬猫が幸せになるために」という信念のもと、動画を作成した。

一人一人にできることを知ってもらうために、保護施設からの引き取りと保護施設の実態について啓蒙した。また、上記の2つのことを中心に、ペットショップや悪質ブリーダーの実態、東京アークさんからお聞きしたお客さんとペットのミスマッチングについても説明した。

□ プリント配布

動画の視聴と同時に見てもらう穴埋め形式のプリントを作成した。

特に視聴者に認知してもらいたい「余剰犬猫問題の現状」と「私たちにできること」の内容部分を空欄にした。なぜなら誰にでもできる犬猫の殺処分問題の改善に貢献する方法があること、また、ペットを迎える際の選択肢はペットショップ以外にもあり、本人の選択によって救われる動物がいるということの2点を確実に知ってもらいたいからである。

□ アンケート調査

今回の活動がどれほどの意識の変化を視聴者に与えられたか、犬猫の殺処分について理解をもらえたかを測るために行った。

具体的には、当問題の動画視聴前の関心度とその変動、保護施設・保護犬・保護猫に対する人々のよくないイメージの払拭ができたかどうかなどを調査した。

加えて、動画に出てくる内容から作成した同内容のクイズを視聴前と視聴後でを出し、正答率の変動により、授業の理解度を測った。

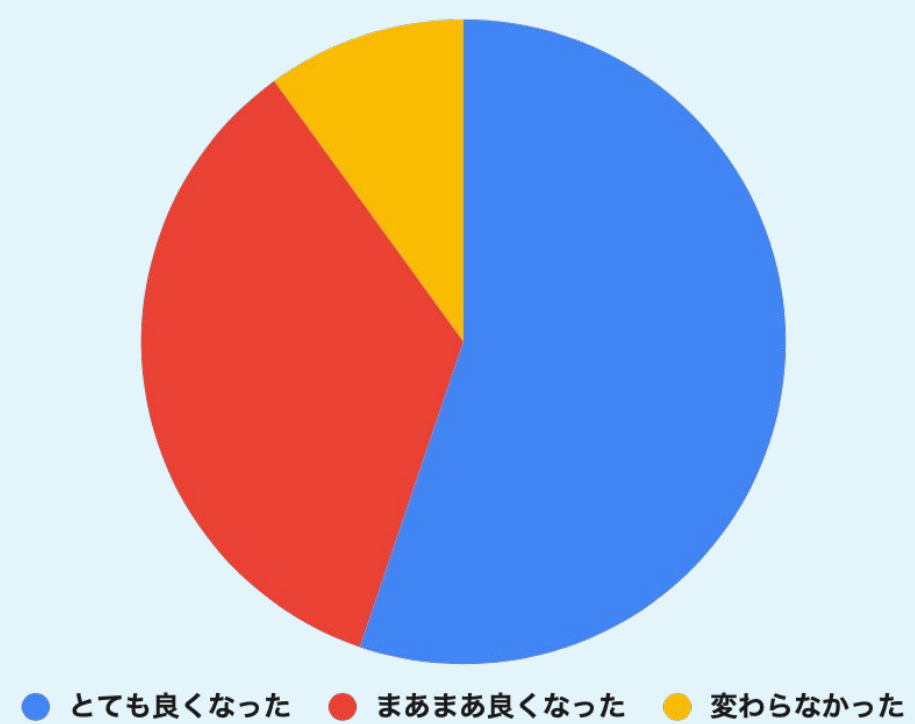


Result

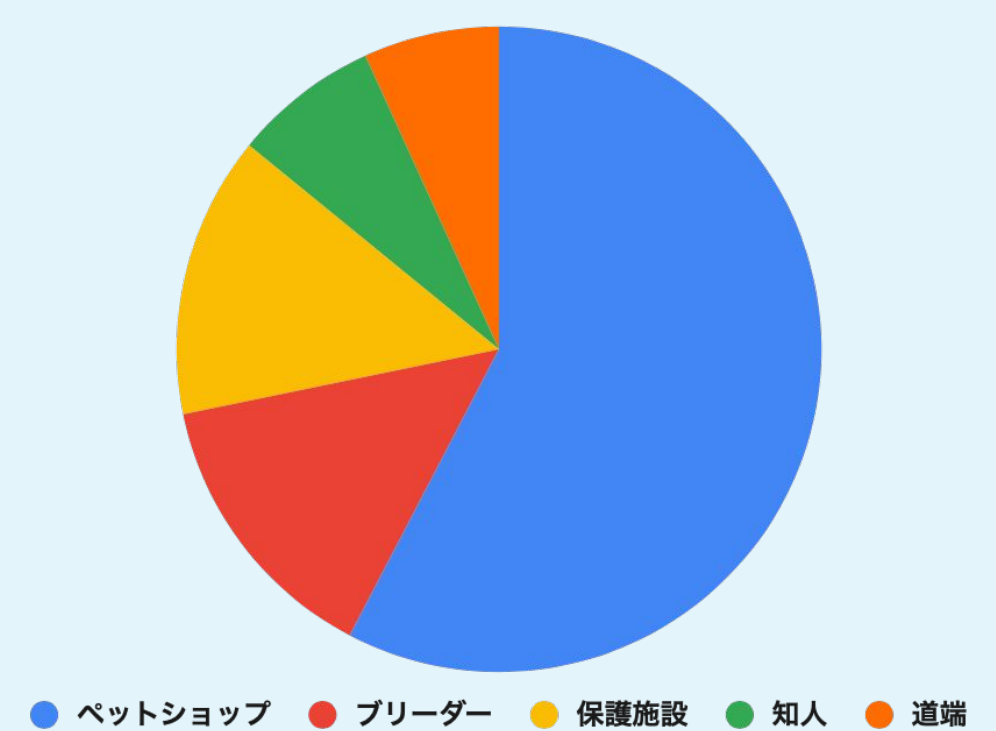
□ アンケート結果

中学生から高校生まで計4学年、約800名にアンケートを回答していただくことができた。事前と事後で同じ内容の犬猫の殺処分に関するチェック問題を解いてもらい、「年間どのくらいの犬や猫が殺処分されているか」という問いに対する正解率は約31%から約89%に上がり、「殺処分数は増加傾向にあるか」という問いに対しては正答率が約24%から約91%に向上した。また、「犬や猫の殺処分の原因がわかるか」という問いの正答率も約49%から約90%に上昇した。このことから授業前と授業後で生徒の意識が大きく変動したことがわかる。これらのことから私たちのプロジェクトは人々の意識を向上させるうえで成功したといえる。

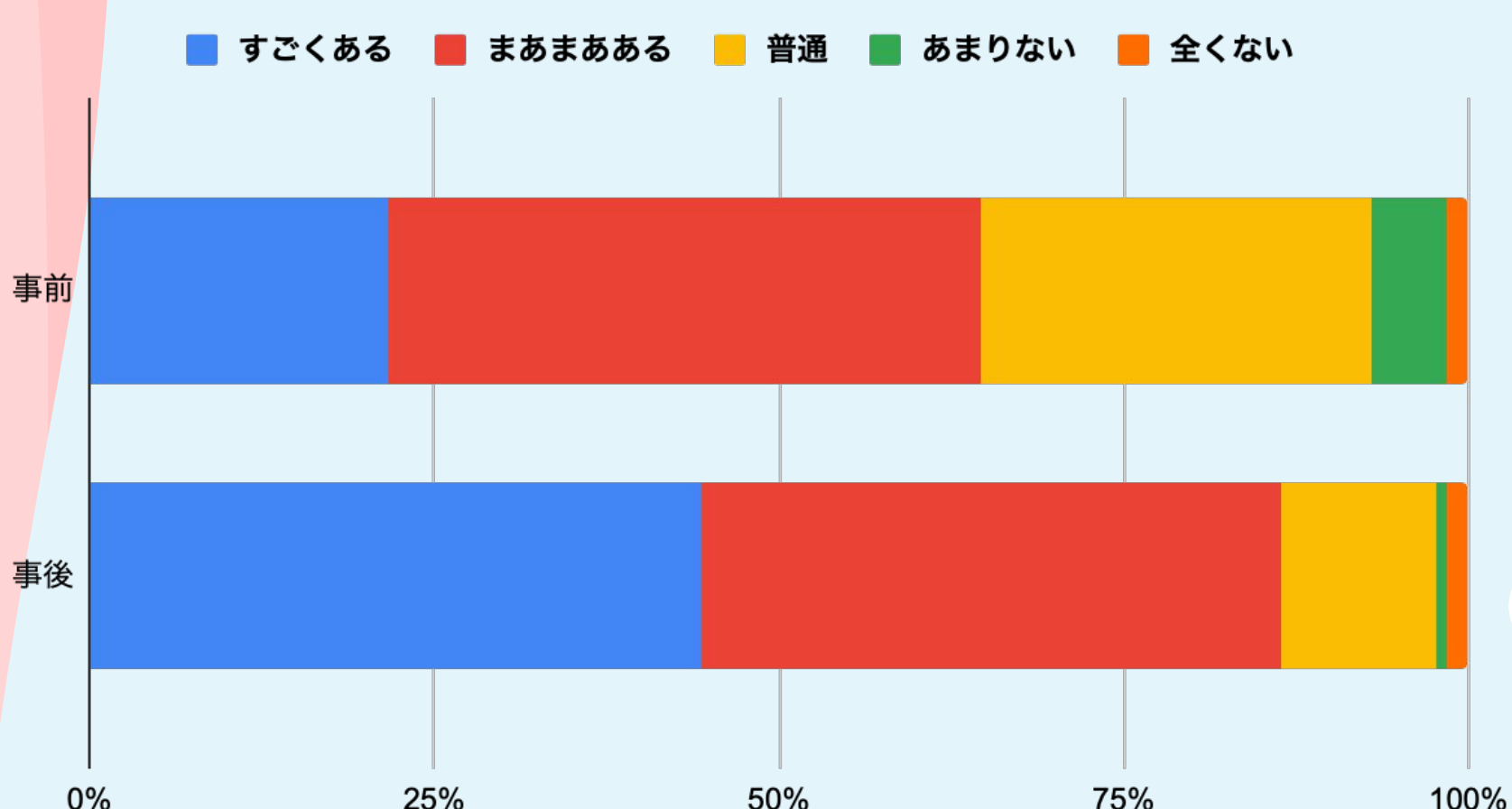
保護施設、保護犬・猫へのイメージの変化



ペットの引き取り先



犬・猫の殺処分への関心度



□ コメント



保護施設の印象が変わりました。暗い現状だけでなく明るい現状も発信してくださりありがとうございました。興味をもったので、殺処分などについて考えていきたいと思います！！

目を背けたくなるけど、人間の都合により殺処分されてしまうのはあまりにもやるせないから、私はできることをやろうと思います。犬猫を飼うときはぜひ里親として彼らを保護施設から引き取りたいです。



Our Aim

□ 足を使った啓蒙活動

今回、私たちのプロジェクトの軸である啓蒙活動は私たちの通う大妻中野中学高等学校にて行われた。

私たちの現住地である東京周辺であれば、実際に赴いて、この問題について関心を持ってもらい、実際解決のためのアクションを起こして欲しいと訴えかけることもしていくつもりだ。

□ SNS舞台での活躍

また、広く情報を広めるべく、SNSを利用した啓蒙活動もしていきたいと考えている。

SNS上には私たちと同じ学生が、同じ問題について取り組んでいる。そこで、実際にコンタクトをとり、遠距離であっても共にできる活動を思案していくつもりだ。各地でムーブメントが起きれば、社会的に注目される可能性も高い。

□ 半永久的に視聴できる動画

校内における啓蒙活動の際、コロナウイルスの猛威を受け、事前に収録した動画を視聴していただく方針をとったことで、そのメリットが浮かび上がってきた。

それは、オンライン、しかも事前に録画してあれば、日本中、世界中のどの地域にでも、犬や猫の置かれている立場、そしてその問題の解決への糸口を伝えることが可能だということだ。これからは、今回作成した動画をアップデートするとともに、英語版、また5年間履修してきたフランス語を活かしてフランス語版の動画の作成を試みたい。

SDGs

4 QUALITY EDUCATION



私たちのプロジェクト自体、犬猫の殺処分の啓蒙を目的とするものであることから、4番の「質の高い教育をみんなに」が当てはまる。今回の啓蒙動画を通じて校内の800人もの人に意識の向上を促すことができたと思う。

12 RESPONSIBLE CONSUMPTION



命をモノ扱いするのは心苦しいが、現状犬や猫をはじめとする動物はモノ扱いである。私たちは需要を大幅に超えた命を生み出し、結果多くの命が人生を全うすることなく殺処分されている現状を変える必要がある。

About Us

私たち3人はそれぞれ違ったバックグラウンドを持ち、オランダ、ニュージーランド、インドネシアと過ごしてきた環境が異なります。その経験は、個々の意見や思考にも大いに影響していて、少なからず意見が食い違うこともありました。しかし、多角的な視点から物事を考え、試行錯誤していく中で、お互いの長所を理解し、それをプロジェクトに反映できたと思います。3年間の絆を活かして、特にリーダーなどは決めておらず、役割分担は毎回あみだくじで楽しく決めていました。